書評・紹介

色井秀譲著

『浄土念佛源流考』

――大無量寿経とその周辺――

櫻部　建

天台真盛宗を代表する学匠の一人閑庵色井秀譲師が、書名に掲げられた主題に関して、戦前から最近に至るまでのたゆまぬ研究活動の成果を集成し、さらに新たな考究を加えられたもの。六百ページに近い大冊で、整然と組織された二篇十章より成る。その第一篇（第一―六章）は浄土念佛の原典と見られる大無量寿経についての論究であり、その第二篇（第七―十章）はそれから展開した後世の念佛行の種々な教説についての論究である。

第一篇第一章成立次第考では、主として、本願文の比較と経全体の構成の比較との二視点からして、大経諸本の成立の順序を考察する。その結論は、呉本が第一に出、次にそれに則って漢本が（筆者は以上二本を甲類と呼ぶ）、そしてその願数を倍加した魏本が中間に位し、その構成をかなり改めて唐本が、それに二、三の改訂を加えて梵・蔵本が、最後にやや異質な宋本が成った（筆者は唐本以下を乙類と呼ぶ）、というものである。

第二章原始形態考では、現存最古の呉訳に先立って、それぞれ仮に「阿弥陀佛二十四願経」「極楽荘厳経」「過度人道経」と名づけ得べき三つの経典が存在したことを〝想定〟し、その三経が結合したところに呉訳の原本が成立した、とする。そして、その三の中、「極楽荘厳経」こそが大経の原始形態と考えられるもので、他の二はそれを素材として〝編纂〟されたと見られる、と説く。いわゆる三毒五悪段は「過度人道経」より由来して本来呉本大経の中に含まれていたものであり、廃悪修善を説く積極的役割を果たすものであった、とする。

第三章は往生本願考で、大経に説かれる多数の本願の中でその中核となると見られる「往生本願」すなわち往生者の往生する因由を説く諸願（呉訳においては第四―七願、魏訳においては第十七―二十願、等）を、さらに、直接その因由を示す「生因本願」と生因を動かすもととなるものを示す「諸佛称揚願」とそれらに密接に関係する「臨終来迎願」との三種に分類して、諸本の上に見られるそれらの形態の変遷とその意味とを考察する。

第四章三輩往生考では、生因本願の成就文とされる「三輩往生の文」と、それに関連する「諸佛称揚願の成就文（これは魏訳以降に出現する）」「三輩往生総説文（ふつうには「第十八願成就文」といわれるもの）」「疑惑往生の文（呉・漢訳では「三輩往生の文」と結びついて存するが、魏訳以後の諸本では経の末尾に近い所に置かれている。オクスフォード版梵文で第四十一章）」とについて、詳細に分析的な比較考察をなし、三輩往

生思想が呉・漢訳から宋訳に至る間に四様の変化を示しながら四段階に（呉・漢本→魏本→唐・梵・蔵本→宋本）展開したと説く。

第五章背後的思想考の初めの二節では、大経の中心である往生思想の背景にあるものとしての種々な思想が、初期（呉・漢本）と後期とに分けて、論ぜられる。初期には、現世利益と奇蹟を語る俗信的思想や、阿羅漢の立場を是認する小乗思想の〝残存〟や、誓願・六度・供養諸佛・不退位などを内容とする素朴な初期大乗思想などを基層として、その上に感覚的な原始的浄土観や崇佛思想を、さらにその上に廃悪修善を強調する因果応報的道徳思想と般若空を意識する以前の原初的空思想とを置くという思想構造が認められる。後期に至ると、その空思想は深まって般若空の思想として現われる。この空思想の進展深化を反映するのが、呉・漢訳に頻出し魏訳以後漸減する「自然」の語と、逆に宋訳に顕著に現われる「無」の語の用例である。また、廃悪修善因果応報の思想は、魏訳以後の諸本においても依然としてその背後に見られるが、唐訳以下では世間的な道徳を抑えて出世間的な徳行を盛り上げ、それを植諸徳本・善根回向に統一しており、その植諸徳本もまた般若空的な反省の上に立つ無相無著の行である、というのが著者の論旨である。第五章第三節般舟三昧思想の項で論ぜられるのは、『般舟三昧経』には明らかに阿弥陀佛経典の影響が見出されるが大経には般舟三昧思想の影響が見られるかどうか、という問題である。結論として、呉・漢本において般舟三昧思想の影響はいまだ萠芽的であるが、魏本以下の四十八願系諸本に至ると、佛を憶念することによって（臨終時という特殊な状況に限定されるが）佛が行者の前に立つということを説く点に、本格的な般舟三昧思想の影響が明らかに認められる、という。

第六章往生思想考は大経の中心である往生思想をとりあげ、ここでも諸本の文の分析的考察に立って、その思想の歴史的展開の段階を論理的な次第を追って把握しようとする。すなわち、歴史的に最も先立つ呉訳三輩往生文（漢訳もほとんど同じ）には、佛教一般に通ずる法則に従って極楽往生を語ろうとする性格が顕著で、自業自得の因果応報の観念や出家重視の傾向が強く見られる。ところが、呉訳の往生本願の中の諸佛称揚の願には、聞名によって往生の可能性が立てられるという点で業の因果の法則を超えようとする考えが見られ、同時にそこに往生を在家救済の道としてより明確に捉えようとする動きも見られる。そして漢訳の往生本願では本願の対機の範囲を拡大する方向にさらに一歩が進められ、出家優位の観念は全く見られず、却って悔過による悪人救済の道を開いている。次の魏訳では、第十八願の独立（呉・漢訳では諸佛称揚願の後半に含まれていた。その独立を著者は聞名思想が大きく取り上げられた結果と見る）・生因本願の一本化（呉訳第五・六・七願、漢訳第十九・十八願が魏訳第二十願に一本化されたと著者は見る）・生因としての一向専念無量寿佛・因果応報の観念の比重の低下・般舟三昧思想の明らかな影響など注目すべき新しい要素が現われる。唐訳では三毒五悪段が消失し、世俗的倫理や出世間的行修と往

生との結合が薄れ、因果応報の観念の比重はさらに低下する。宋訳では、生因本願と来迎本願が合して一生因願となるからすべての衆生は同一往生を得べきこととなり、その生因はまた名号の憶念に統一されている、などの点に往生思想としてさらに進展が見られる。こうした往生思想の展開の経過の中で、往生の対機はよりひろく善悪凡夫人にまで拡大され、生因としての広い多難な行業はより簡易なそれ（専念無量寿佛とか名号憶念とか）へと集約されてゆき、そこにやがて後世に他力易行道思想の咲きいずべき素因を十分に含んでいるけれども、経自体ではその開花にまでは至らなかった。大経諸本展開の歴史の限りではついに称名念佛を生因とする往生思想は現われ出なかった、とするのが著者の見解である。

第二篇は「浄土念佛編」と標題されるが、大経以後の諸経論に見える浄土念佛思想が取り上げられる。第七章執持名号考が『阿弥陀経』を、第八章易行念佛考が『十住毘婆沙論』を、第九章五念門念佛考が『往生論』を、第十章観想念佛考が『観佛三昧海経』『観無量寿経』および善導の諸釈を論究する。

第七章には、小経構成の素材として先に挙げた「極楽荘厳経」の原型が用いられたという大胆な推定もあって注目を惹くが、結論として、小経の趣意は「佛説を聞くことによって知らされた阿弥陀佛の名号を、（佛説を信受して、）憶念し発願願生すれば、不退転を得て往生する」ということを示そうとするところにある、と説く。往生について善根の価値を低くみ名号の憶念を唯一の生因としたこと、願生によって不退転を得られるとしたことなどは、この経の特異の説示である、とされる。

第八章では、十住論の念佛思想は易行品と念佛品以下の六品とに見えそこでは念佛三昧と般舟三昧とが密接に一つに結びついていること、十住論は「漸々転進の菩薩」すなわち（主として在家の）鈍根の菩薩のために説かれたもので本来初二地の釈までで完結しているものであること、十住論・智度論の著者が依用した浄土経典の中、般舟三昧経は現存『大集経賢護分』に近く、大経は魏訳に近く、小経は用いられていないこと、十住論に説かれる初地の特相は阿惟越致と観見諸佛すなわち般舟三昧とであり、前者は易行品に後者は念佛品以下での六品に明かされているから、この論の念佛思想は初地観全体が念佛に集約されるごときものであること、論では般舟経の所説を超えて般舟三昧に色身の念佛・法身の念佛・実相の念佛という三段階を立てるが、さらにそれを集約して十号念佛を説くのであるから、般舟三昧は如来の十号による諸佛の念観に帰着すると見られること、すなわち般舟三昧を念佛三昧として取り上げ、佛の憶念を名号の憶念にしぼり、称名憶念をもって易行の中心としつつこれに聞名・信受・称讃・礼拝を結びつけたものが十住論の念佛であるが、それはなお称名憶念を中心とした整然たる体系を成すには至っていないこと、などの諸点が論じられる。

第九章に著者は説く。無著・世親の佛教思想からいえば願生は方便説というべきである。しかしそれを瑜伽佛教の地盤に載せて瑜伽佛教と同じ道を歩ませるのが〝世親の祈り〟であった。方便説にすぎなかった極楽願生を正系の瑜伽佛教として組織立

てたのが『往生論』である。龍樹においては未だ無組織であった念佛に、礼拝・讃嘆を前提とし作願・観察を中核とし回向を後得智的展開とする体系を与えることによって、浄土念佛が初めて〃組成〃され、そこに新たに観察が浄土念佛における重要な要素として着目されることになった、と。

第十章では、『観佛三昧海経』と『観無量寿経』とを比較して、海経が観想の対象を佛身に限るのに観経は佛身・佛土に亘る点、海経の観想は佛一般に関するが観経では阿弥陀一佛に限られる点、海経の観想の解説に比して観経のそれは遙かに組織的である点などの相違は見られるが、両経には深いつながりがある、とする。それはともに末世凡夫のための教説であり、ともに佛身観から佛心観へと進むものであり、ともに佛観想の根源を能観者の主体性に繋るものとしそれによって凡夫に佛観想の可能性を確立している、というのが著者の見解である。また、著者によれば、般舟三昧と観佛三昧との間には決定的な相違がある。前者はなお佛在世時を遠く隔たらない時期にあって、在世時の佛弟子がなしたと同様な佛との現前の値見を期待している。後者は佛を去ること遠い時代にあって遙かかなたの佛を願求し想望して眼前にその相を描くのである、と。大経の一向専念無量寿佛にも小経の執持名号にも五念門の中の讃嘆門にも観佛三昧行にも称名念佛への契機はひそんではいるが、それが顕然として来るのは中国の浄土念佛の祖師らによる。曇鸞・道綽らはなお、三昧的念佛からの脱皮を目指して称名念佛を摸索している段階にとどまっているが、善導に至って、ついに三昧から脱却した称名念佛観が確立された。著者はそれを新しい念佛思想展開の原点と見ると共に、源流的な浄土念佛観の終焉と見るのである。

以上、かりそめな内容要約を与えたが、それから知られるように、この研究は綿密な分析的推論に基づいて、創見に富んだ新奇な主張を数々提示している。著者は、従来諸家の研究に時に見出されたようにのちの浄土教の宗学的見地を大経解釈や初期浄土思想解釈の中にもち込むことを厳に退け、歴史的順序を追ってその思想展開の経緯を明らかにしようと努めているが、この魅力ある書は今後の初期浄土思想研究の上に新たな幾多の問題を提起したものといえるであろう。

（昭和五十三年二月、百華苑A5版、五九五頁、七、〇〇〇円）

附記　この書の中に、般舟三昧経諸本の成立の順序を論ずる箇処で、かつて発表した拙論に対する示教がある。それについての卑見は「同朋佛教」第十二号に載せたので、参照を得れば幸甚。